岡田半江「山水図巻（大川納涼図）」（関西大学図書館蔵）

中谷伸生

大坂の蒹葭堂とその周辺に集まった画家たちの親密な交流は、江戸時代後期における文人画の世界の基盤であった。文人画とは、まさしく、親しい人と人との交流を基盤として成り立つ絵画である。そうした文人画の典型を示す岡田半江（一七八二－一八四六）の絵画として、「山水図巻（大川納涼図）」（関西大学図書館蔵）［図1－9］を採り上げてみたい。[1]

そもそも文人画とは、中国から移入されたものであるが、日本の文人画は中国のそれとも違った独自の展開を遂げたといわれる。十八世紀における黄檗文化及びその周辺の舶来の画譜類を手本にして、中国に憧れた知識人が日本の文人画をつくりだした。とりわけ、画譜の『芥子園画伝』による影響は決定的で、日本の文人画家のほとんどが、大なり小なりこの画譜をひも解いたといわれる。日本の文人画は、日本独自といっても、やはり、基本的には中国の文人画を手本にして新たな構想を練ったものであることはいうまでもない。中国の士大夫という階級を機軸に据えながら、「文人」という身分による絵画が、本来の文人画であるという主張が唱えられて久しい。すなわち、日本の「文人画」概念は、身分に根拠を置く「士大夫画」という概念を採り上げて、大上段に構えた解釈が延々と語られ、その実態がなかなか把握できない状況であった。本稿では、蒹葭堂を中心とする大坂の文人画家たちの交流の一典型として、半江の「山水図巻（大川納涼図）」を採り上げ、文人画の一つの型を紹介してみたい。

半江のこの図巻において示された友人間の交流を表現した絵画は、中国の文人画にその起源をもつ。文人画家たちの交流における書画の贈答という友情の証ほど、文人画の性格を端的に物語るものはないであろう。この観点から考えてはじめて、文人画家の田能村竹田が、大画面ではいささか精彩を欠くにもかかわらず、なぜ小画面の絵画において鋭い才気を示し、その制作に情熱を傾けたのかという疑問の一端が明らかになろう。また、色紙などの小画面の絵画を用いて、友人間の交流を温めた大坂画壇の画家たちの状況も注目すべきである。

岡田半江は、岡田米山人の子で名を粛、号を半江といい、天明二年（一七八二）に大坂で生れたといわれるが、伊勢の国の津で生れた可能性も捨てきれない。幼少時から父米山人に絵画を学び、はじめ小米の号を用いたが、二十歳を過ぎた頃に半江と改めている。文化四年（一八〇七）二十六歳の時に発刊された『浪華画人組合三幅対』に「岡田半江　藤堂家中」と記されている。この記述から米山人とともに藤堂藩大坂蔵屋敷に仕えたことが判明するが、正式には二十八歳から仕えたという。[2] 文政六年（一八二三）発刊の『浪華金襴集』、『続浪華郷友録』（文政六）、『新刻浪華人物誌』（文政七年）、そして天保四年（一八三三）発刊の『竹田師友画録』などの記録をまとめると、藤堂藩に仕えた後の天保三年（一八三二）頃に早々と隠居して、おそらく天満橋界隈で隠居生活に入り、しばしば淀川の舟遊びを楽しんだという。しかし、天保八年（一八三七）の大塩平八郎の乱をきっかけに住吉浜に引っ越して、その地で弘化三年

（一八四六）に亡くなった。大塩平八郎は半江の親友であった。また、竹田、篠崎小竹、頼山陽らとの交流も知られている。

ところで、半江の作風は、父米山人の豪快な作風とは逆に、繊細で鋭く、独特の詩情をたえたものである。従来の評価では、米山人に対する高い評価の陰に隠れているといってよいが、嘉永六年（一八五三）刊の『古今南画要覧』には、〈不判優劣〉の項目の最上段に半江の名前が大きく記載されており、そこには蒹葭堂、與謝蕪村、青木夙夜、釧雲泉、貫名海屋、長町竹石、中林竹洞、十時梅厓、福原五岳の名前が並んでいる。また、米山人の破天荒とも思える豪快な絵画は、高く評価されねばならないが、絵画的造形力という観点から検討すれば、良くも悪くも大味で粗放な作風の米山人よりも、緻密な描写力をもつ半江の方を高く評価すべきかもしれない。たとえば、四メートルに及ぶ「山水図巻（大川納涼図）」に見られる線描の鋭い切れ味は、半江が江戸後期の数多い画家たちの中にあっても、抜き出た才能をもつ画家であることを如実に示している。

この「山水図巻（大川納涼図）」は、巻末の落款「天保辛丑」の年記から、天保十二年（一八四一）に制作されたことが判明する。そして、巻頭に広瀬旭荘の題字「濠濮間想」（図1）を貼付している。後の嘉永二年（一八四九）に旭荘は再び跋（図9）を書き込み、そこには、丁度十年前に半翠に頼まれて題字を書き、今また半翠の零落した子孫から画家の藤井藍田がこの画巻を手に入れて、跋を依頼してきたと記している（図9）。田能村竹田に絵画を学び、八木巽処に書を習った藍田は、旭荘に詩文を習っており、何としてもこの画巻を手に入れたかったにちがいない。つまり、この「山水図巻（大川納涼図）」を通じて、半江、旭荘、藍田、竹田、巽処、そして蒹葭堂と繋がる文人交流の連鎖が鮮明に浮かび上がる。ここでもまた、友人たちとの交流の事実が絵画によって語られており、文人画の一典型となっている。[3]

さて画面を見ると、対角線状に斜面を描き、数本の樹木を配した場面（図2）は、緑、藍、茶の淡彩を施され、左手の川の空間を際立たせている。上空には五羽の鳥が飛び、その左手の大坂の街並みへと画面は展開していく。樹木の形態（図2－2）は、切れ切れの繊細な線描によって形づくられている。夜の大坂の街（図3）は、簡潔な形態描写でまとめられているが、家々の屋根（図3－1）はごく細い線によって瓦の並びまで描かれている。淡墨を刷かれた暗闇の空には、ところどころ薄い紫が塗られていて、闇の雰囲気を整えている。手前には四隻の小舟が浮かび、さらにその手前には七隻の大きな遊覧船（図3－2）が浮かんでいる。船内には赤い提灯が吊り下げられ、大勢の客が乗り込んでいる。舟の周囲に鋭く刷かれた淡墨の効果が利いており、画面全体に鋭く洗練された気分を与えている。続く場面（図4）には湖水と橋が配置され、彼方の林の奥に大坂城の姿が遠望される。林の描写は半江独自のもので、米法風の筆致によって、鋭くて短い線描が繰り返し引かれている。こうした描写（図4－1）に半江の得意な才気が見てとれるのである。続く場面（図6）には数件の家屋が描かれ、家の中には赤い服をきた人物が一人（図6－1）こちらを向いている。これらの描写は、いくぶん竹田風だといえるかもしれない。続く場面（図7）には船着場で舟に乗った人物とそれを見送りに来た人たちであろうか。今、小舟が岸を離れよう

としているところである（図7－1）。この場面の描写は、鋭い線描を抑えて、ゆったりとしたやわらかい雰囲気を醸し出すように工夫がなされているのであろう。

画面のあちこちに、半江によって詩文が書かれており、それを部分的に紹介すると、「金城半翠維船於小紀邸前岸待翁来」（墨書）（図2－1）及び「焔火上天星若雨」（墨書）（図3－3）があり、大川の納涼を楽しむ半江が、半翠なる人物と待ち合わせて一緒に乗船し、あたかも船や川岸の料亭の燈火が星空に映ったという美しい詩を詠み、それを絵画化している。続いて「追反天満橋時前聯落得」（墨書）（図5－1）、「到網洲成急道、吟舟前在幽閑地、独領長江万里涼」（墨書）（図5－2）と書かれているが、つまり、天満橋を通って網島に着き、長江万里を引き合いに出し、涼を詠って三十年昔を回想して懐かんでいる。[4] 夜の暗闇に浮かぶ大坂の街（図3）は、鋭くて細く、神経質とも思える洗練された線描によって簡潔に描かれており、秀抜の一語に尽きる。短い筆触を無数に重ねながら描かれた爽やかな情景は、半江独自の造形を示すものである。山野の描写に用いられた緑色を基調とする色彩もまた鮮明かつ爽快な印象を与えている。広い余白の空間内に画と詩をバランスよく配置した構図は見事である。この図巻に描かれた絵画は、岡田半江という一人の画家によって制作されたが、巻頭の旭荘による題字「濠濮間想」と、巻末のやはり旭荘による跋文もまた、この図巻の切り離せない一部分である。さらに見逃せないのは、半江の絵画に旭荘の跋文を付け加える構想を練った藤井藍田もまた、この合作という性格をもつ図巻の成立に参加した人物だということである。つまり、この図巻は、単に造形的側面や詩文の意味だけで鑑賞されるべきものではなく、旭荘や藍田の狙いをも含めて理解されなければならない。この画面には、観者が直接「目」で見て鑑賞する側面と、藍田らによる構想をも含めて理解すべき、いわば観念的な領域とが混在していると考えるべきであろう。それこそが、一つの書画をめぐって、そこに集まってきた人々が、さまざまな思いを述べることによって成り立つ共感の世界である。すなわち、それが市民の絵画としての文人画に他ならない。絵画にはさまざまな種類があって、主として造形的観点から見るべき作品もあれば、一種の観念を理解しながら鑑賞すべき作品もある。江戸時代の文人画は、どちらかといえば、後者に属す絵画である。

半江の絵画にも見られるように、江戸時代における文人画の一つの重要な定義としては、士大夫画という中国の知識人による絵画の流れに立つ絵画という定義を離れて、書画の贈答を踏まえて、〈親しい友人との交流の絵画〉だと結論づけておきたい。日本の文人画家の代表者といえば、池大雅、與謝蕪村、岡田米山人、浦上玉堂らの名前が挙げられるが、誤解を恐れずに突き詰めていうと、文人画家らしい画家の名前を挙げるとすれば、それは田能村竹田と岡田半江だといってよいかもしれない。両者はしばしば酒を酌み交わした親友であり、竹田は『竹田荘師友画録』において半江を「今歳ノ春、ソノ近芸ヲ閲スルニ、上進一等、旧面目ニ非ザルヲ覚ユ矣」と論じている。両者ともに鋭く繊細な画風を保持したことは、単なる偶然ではなかろう。

註

① 山岡泰造「中野家旧蔵『書画帖』をめぐって他」、『江戸時代における大坂画壇の研究』（平成十年度・十一年度科学研究費補助金研究成果報告書）、平成十二年（二〇〇〇）、四頁。関西大学図書館編『関西大学所蔵 大坂画壇目録』、平成九年（一九九七）、三一頁、一二一－一二二頁。

② 大阪市立美術館編『近世大坂画壇』、同朋舎、二七五頁。

③ 前掲書、『関西大学所蔵 大坂画壇目録』、九九頁、一〇〇頁。

④ 同書、九九頁。

［資料］

箱書「半江山水巻　宜春亭蔵」

○岡田半江筆「山水図巻（大川納涼図）」（関西大学図書館蔵）絹本墨画淡彩　十四・七×四〇〇・七センチメートル

○広瀬旭荘書（巻首題字）（別紙）紙本墨画　縦十四、七×横六四、六センチメートル「濠濮間想　謙」（墨書）、「広瀬謙印」（白文方印）、「字吉甫」（朱文方印）

○岡田半江（画面上の墨書による詩文と落款）

「金城半翠維船於小紀邸前岸待翁来」（墨書）、「半江」（白文長方印）

「為我誰成忍暑謀　水雲一掉附蒼浪　船離岸時得此二句」（墨書）、「半江」（白文長方印）

「焔火天星若雨　妓影動地致実簧　先題後聯随画意」（墨書）、「半江」（白文長方印）

「朝遙赤壁先前賞　月澹瑗盤吸細光　追反天満橋時前聯落得」（墨書）

「半江」（白文長方印）

「到網洲成急道　吟舟前在幽閑地　独領長江万里涼」（墨書）、「半江」（白文長方印）

「余昔日更穏之地在於梅庙西岸餘坐読書處多挿緑蕚楳穏失火為烏有可惜哉」（墨書）「半江」（白文長方印）

「前読書處近源溌雪月披蓑荷竿往来打幾許屈指向三十季回首如昨夢」（墨書）、「半江」（白文長方印）

巻末「天保辛丑六月初八応　金城二兄招川上納涼随興図成　後経五日着色　寒山寺外塞翁半江」（墨書）「無声」（白文方印）、「田亞子」（白文方印）

○広瀬旭荘書（巻末跋文）（別紙）紙本墨書　十四・七×三九・三センチメートル

「十年前半翠使余題此　巻之首今歳藍田復携此　巻来日半翠家人典此吾　嘗厚半翠不忍視其零落乎他人手購之請跋此尾余日　人竭畢生之力聚其所好一　蓋棺則雲飛煙散其何　如哉而君与半翠誼侔兄弟代主持此則半翠為不死生厚死薄人情所因然善　哉君之有始終也我其亦始終此巻乃書　嘉永己酉八月　旭荘主人謙」、「広瀬謙印」（白文方印）、「吉甫」（朱文方印）

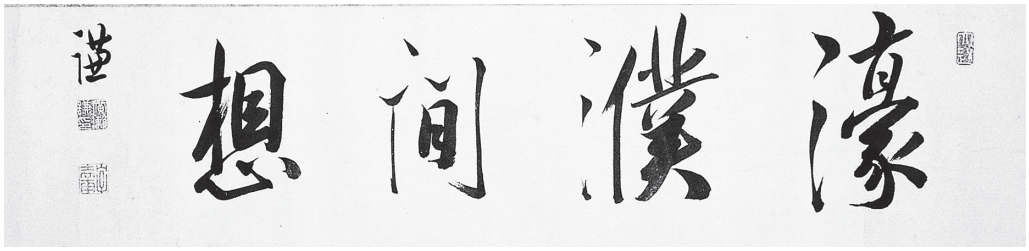

図１　岡田半江「山水図巻（大川納涼図）」 題字（広瀬旭荘）

図２

図３

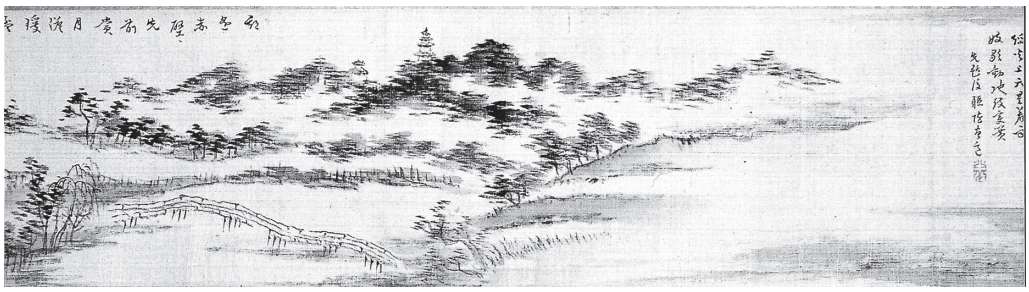

図４

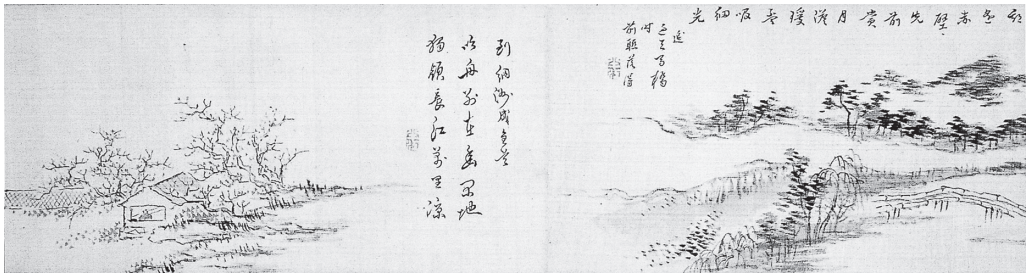

図5

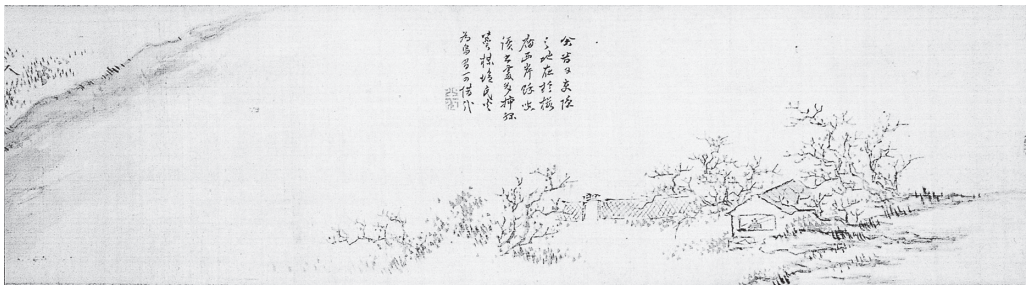

図6

図7

図8

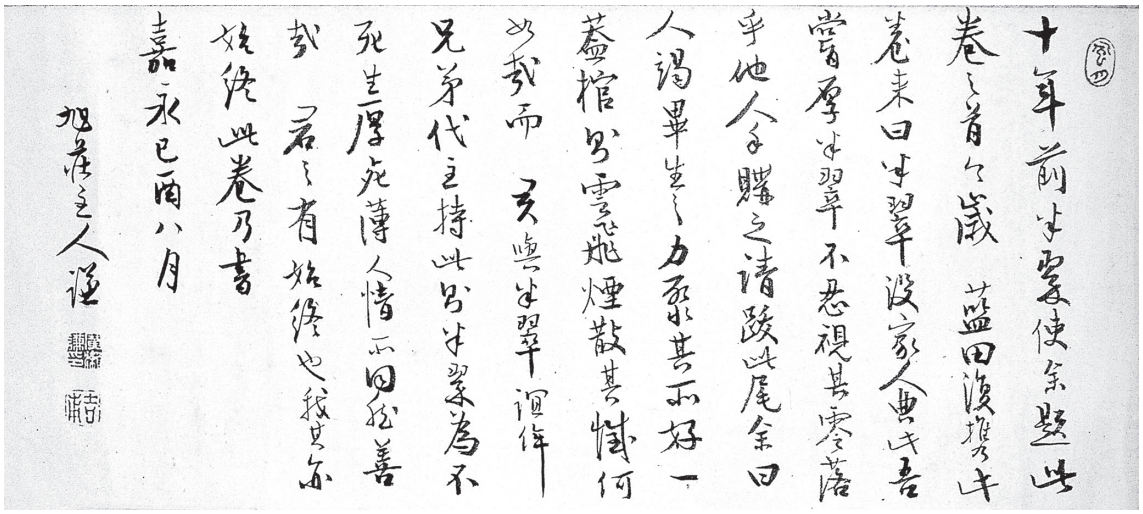

図9　旭荘による跋文

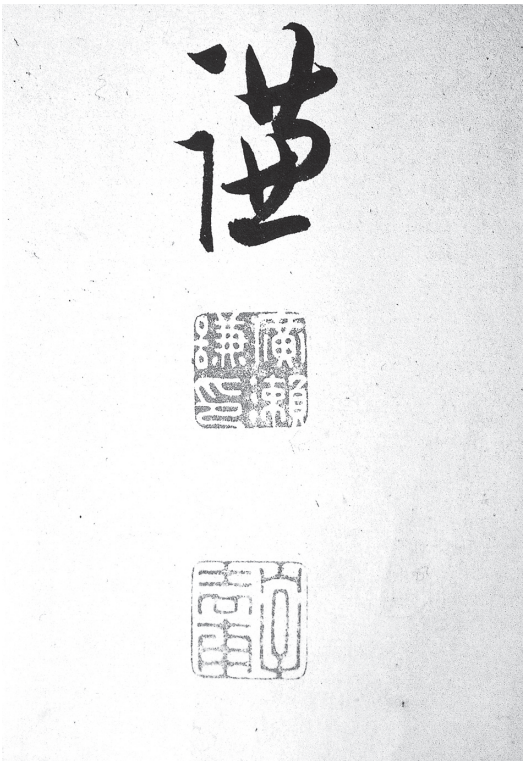

図1-1　旭荘落款

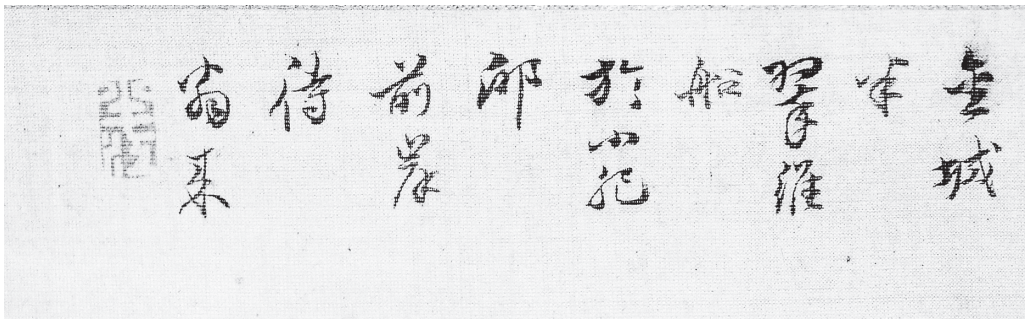

図２－１

図２－２

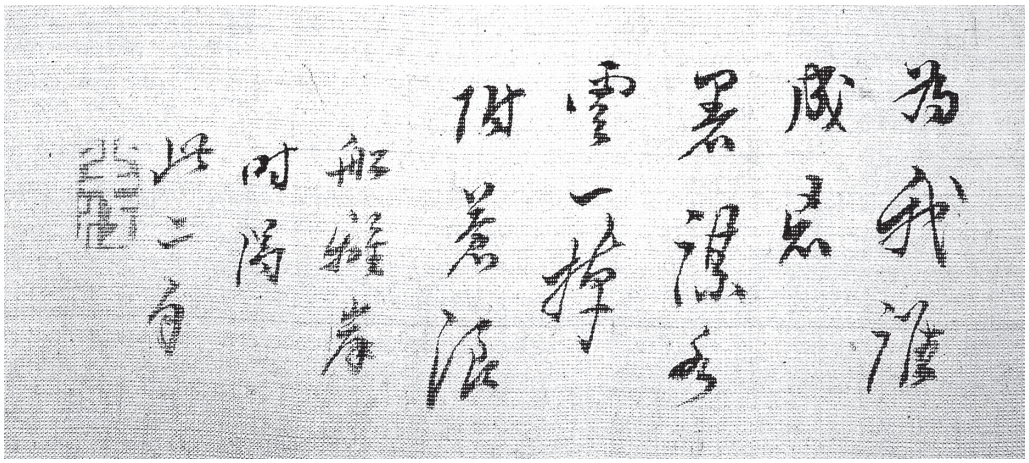

図２－３

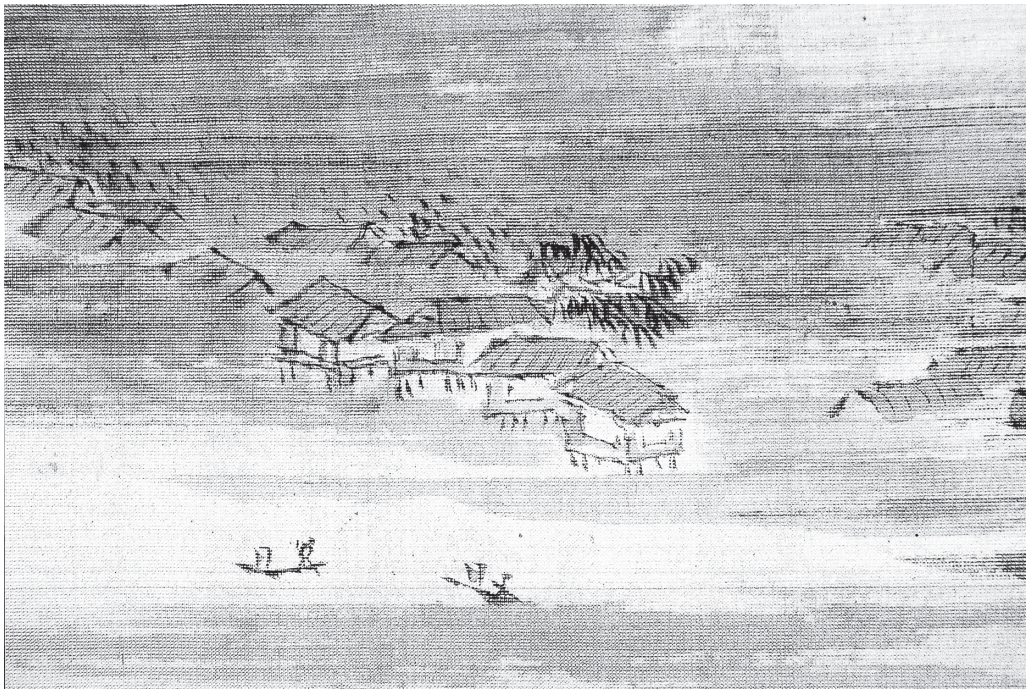

図３－１

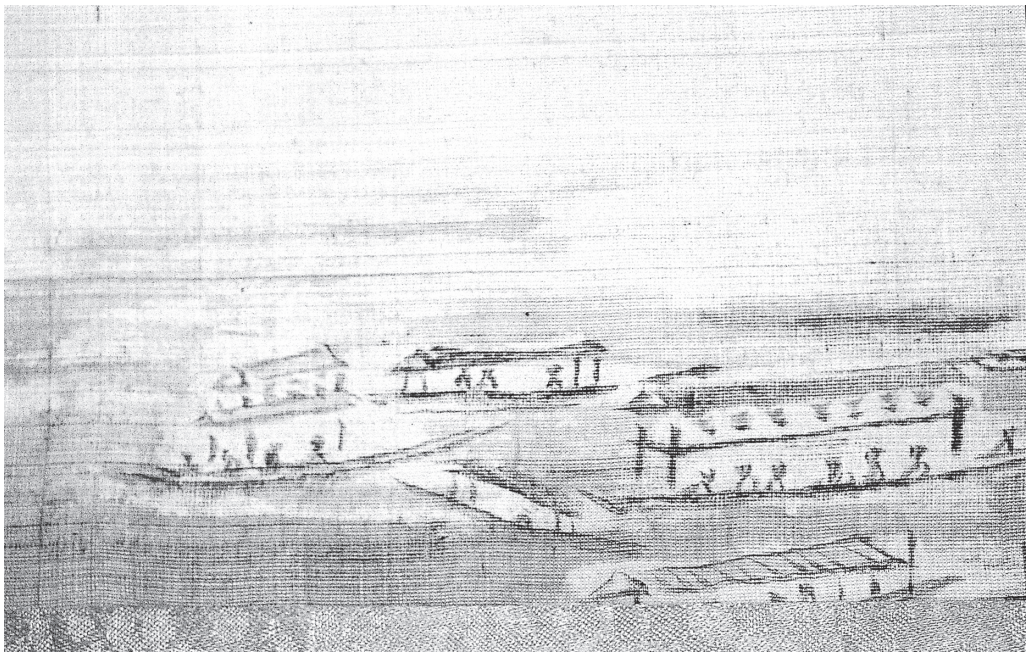

図３－２

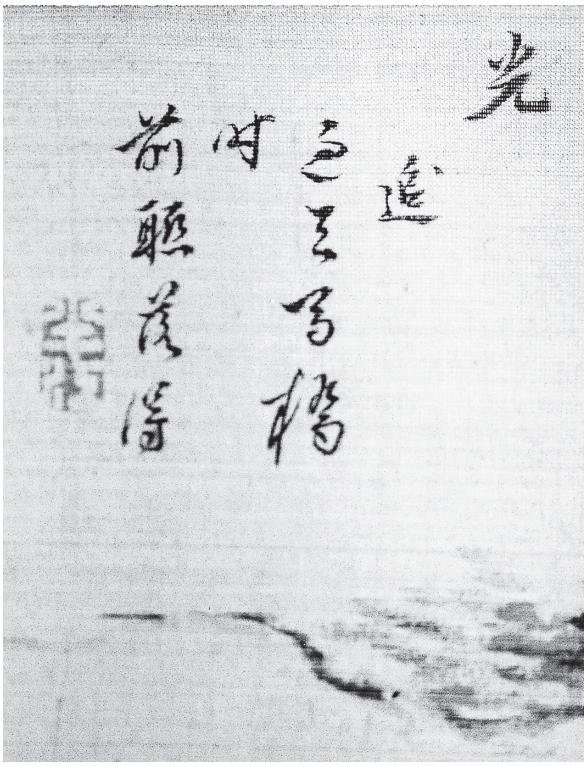

図５－１

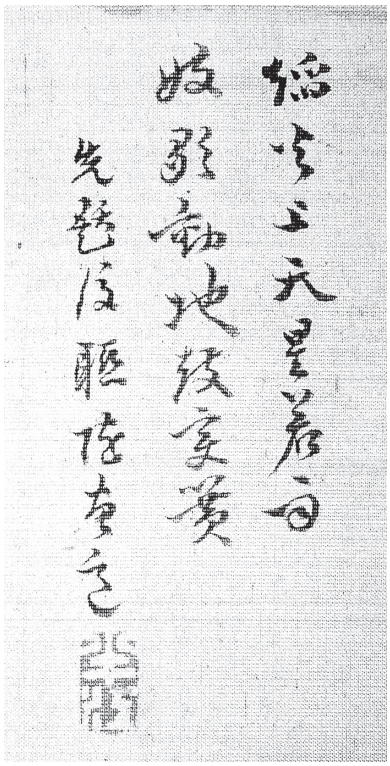

図３－３

図４－１

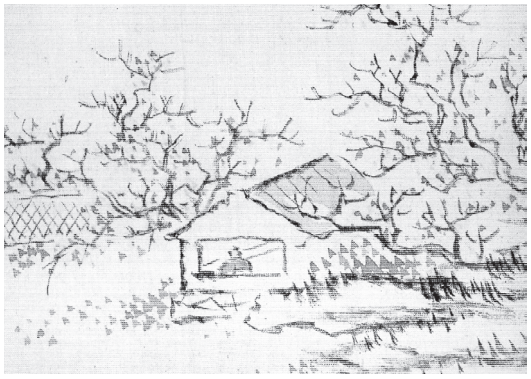

図６－１

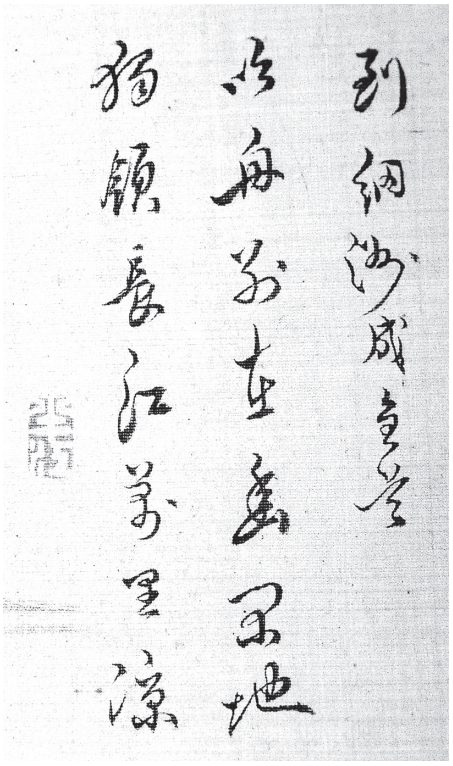

図５－２

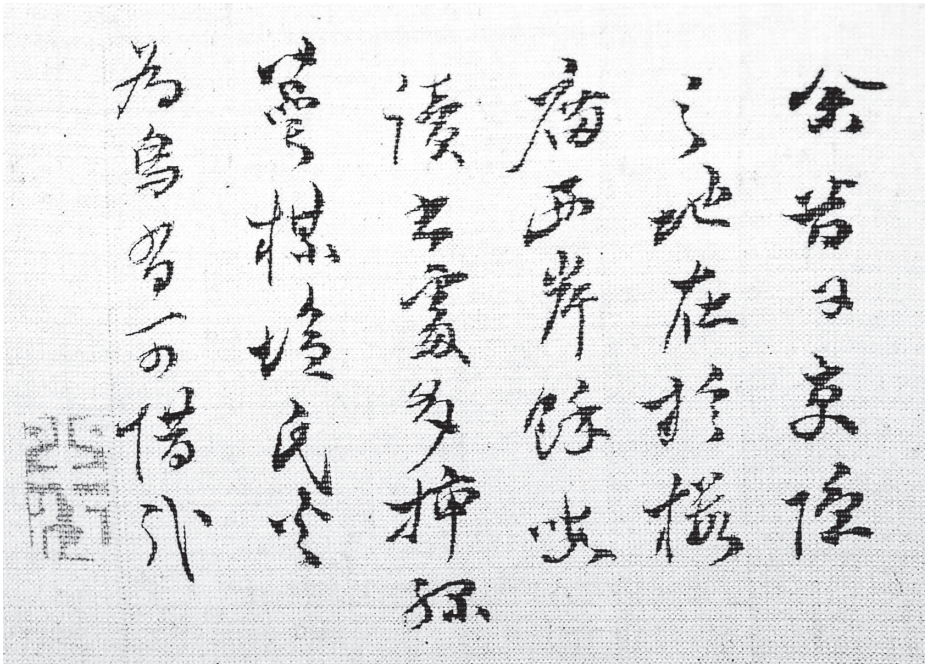

図６－２

図７－１

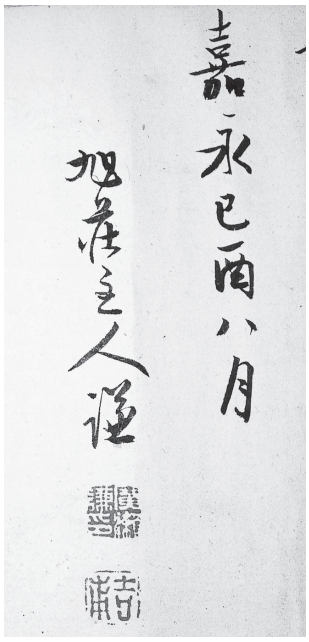

図９－１

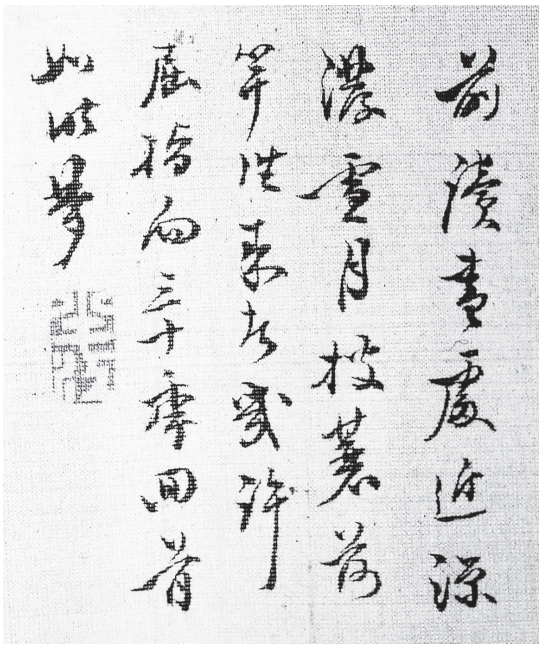

図８－１

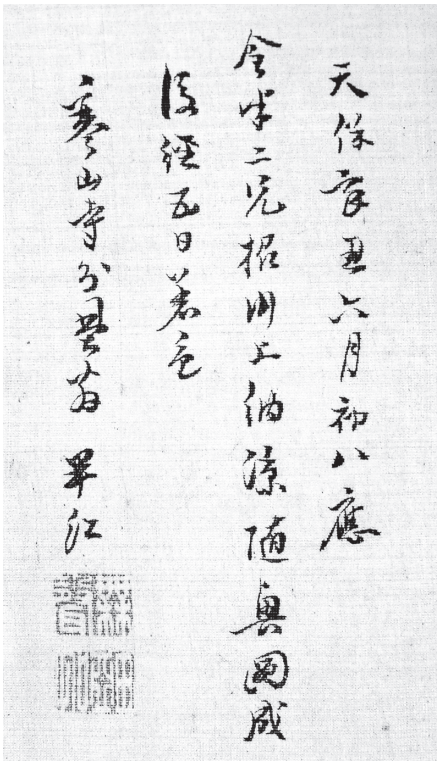

図８－２